

編集後記

流通情報学部が開設されて15周年を迎えた。本号はその記念となるものであるが、記念号発行の企画が発表されたのは、秋も深まった昨年11月のことであったように記憶している。企画発表から原稿締切まで時間がなかったにもかかわらず、教授会メンバー全員から原稿が寄せられた。通常発行の巻号ではめったに見られないことであり、学部に対する熱い思い入れの表れであろう。

流通情報学部開学の理念は商流、物流、情報の各学問領域が三位一体となって社会のニーズに応える若い人材を育てようというところにあったと聞く。開学後6～7年間はITブームと当時はまだ新興工業国といわれた韓国、中国で物流への関心が高かったことを背景として、留学生を含め志望する学生はとても多かった。15年の歳月を経た今日、流通情報学部を志望する学生はかなり減ってしまった。移り変わりの早いこと、光陰矢の如しである。

その間大学院物流情報学研究科が学部付置の形で開設されたこともあり、三位一体の一角である商流の教授陣が手薄になってきた。この手薄さは経済学部の教員スタッフにカバーしてもらっているが、学部教育の重心が微妙に変わってきているかもしれない。また、時代の変化を取り込んだ「生きた学問」を偏重するあまり、基礎教育への配慮とカリキュラムの有機的体系化が疎かになっていないか、いま一度点検する必要があるのではないだろうか。

私をはじめて大学の教壇に立った1970年代後半に比べて、現在の学部教育はきわめて丁寧に行われている。それにともない、年間講義回数の確保、授業開始・終了時間の遵守、充実したシラバスの提供等々、授業の準備と実施に費やす時間がひじょうに多くなっている。さらには各種委員として学内行政に関与しなければならない時間も多くなっている。大学教員は十分な研究時間が確保できず、研究論文が質と量ともに低下してきたのではないかと危惧する。このように教育と研究の両面で課題が山積するなかで、我々は和と海容の精神のもとで一致協力して難局に向き合うことが何よりも大切なことであろう。

(高田記)